

がんセンターにおいて形成外科的手技を要した症例における治療成績の検討

1. 研究の対象

当センターで形成外科医による診療を受けた患者さん

2. 研究目的・方法

がんの集学的治療として、手術、放射線、抗がん剤などの薬物治療が行われていますが、がん切除や放射線障害などの影響で、日常生活に不可欠な機能（摂食、会話、歩行など）に障害をきたしたり、整容的に苦痛を伴う変形をきたしたり、ときには生命の維持を脅かす組織欠損が生じことがあります。このような患者さんに対し、形成外科は、患者さんの社会復帰のために、皮弁移植などの再建手術や、保存的治療を含む創傷外科的手技を発展させてきました。治療法の選択肢も多様化しており、特に体の他の部位から採取した組織を血管吻合により生着させる遊離皮弁移植や、血管吻合を伴わない有茎皮弁移植は、再建外科の主要な術式として広く行われています。しかし、皮弁壊死などの重篤な術後合併症を起こすと、患者さんは予定外の再手術や長期入院を余儀なくされ、治療後の大幅なQOL（生活の質）低下につながり、時には致命的になることもあります。

形成外科において手術や保存的治療を受けられた患者さんの転帰や手術成績、術後合併症などを、既存情報を基に後ろ向きに評価することで、治療法の妥当性を評価し、今後治療を受ける患者さんの治療方針選択を最適化したり、さらに有効な治療法の開発につなげていくことを目的とします。

診療録から得られる情報から、患者さんの年齢、性別、既往疾患や既往治療などの患者背景因子、がん治療を行うことになった疾患因子とその治療法、実際に行った形成外科的な治療法といった治療因子を調査し、手術後の経過、皮弁壊死や感染などの術後合併症、術後機能回復の程度、入院期間、患者さんの満足度などの治療成績との関連を解析します。

研究期間：倫理審査承認後～2031年7月1日

3. 研究に用いる試料・情報の種類

情報：

患者さんの年齢、性別、既往疾患や既往治療などの患者背景情報、がん治療を行うことになった疾患情報とその治療法、実際に行った形成外科的手術などの治療情報、手術後の経過、皮弁壊死や感染などの術後合併症、術後機能回復の程度、入院期間、患者さんの満足度などの治療成績 など

治療前、治療中、治療後の経過を記録するために得た画像情報（CTやMRI、内視鏡などの画像検査や、治療部位を撮影した写真、動画など）を、個人が特定できないように配慮して研究に使用し、学会や学術誌などで公開することもあります。

4. お問い合わせ先

本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。
ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。
また、試料・情報が当該研究に用いられることについて患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としませんので、下記の連絡先までお申出ください。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：

研究責任者：栗田 智之

大阪国際がんセンター 形成外科 主任部長

住所：〒541-8567 大阪市中央区大手前3-1-69

電話：06-6945-1181

-----以上